

12月25日（金）その113 サンタクロースっているのでしょうか？

今日はクリスマス特別バージョンで、時間を延長して 15 分間です。

皆さんは、「サンタクロースっているんでしょうか？」（偕成社発行）という絵本を知っていますか？（実物を見せる）

5～6年前私はこの絵本を読んで、「中学生にも教えてあげたい」と思い、プレゼン（パワーポイント）を活用した校長講話に仕立てました。校長講話では毎回冒頭の5分くらい、子どもたちの学校生活の様子を紹介する「ありふれた光景」というコーナーがあり、スライドショーで多くの写真を見せていました。その BGM には松任谷由実の「恋人はサンタクロース」を使用しました。今日は実際に中学生に見てもらったプレゼンを活用して、お話をしたいと思います。ネットで見て下さっている方のために話の概要を書きます。

1897年（120年前）、アメリカのサン新聞に8才の少女から質問が届いた。

Dear Editor, I am eight years old. Some of my little friends say there is no Santa Claus. Papa says "If you see it in The Sun it's so."
Please tell me the truth, is there a Santa Claus? Virginia O'Hanlon.

新聞のおじさん。あたしは8歳です。私の何人かの友だちはサンタクロースはいないと言います。パパは「サン新聞に聞いてごらん。サン新聞が言うことならそのとおりだよ」と言います。どうか私に本当のことを教えてください；サンタクロースはいるのでしょうか？ ヴァージニア・オハンロン

アメリカの「サン」新聞は、粹なことをしました。社説で質問に答えたのです。社説を書いたのは、フランシス・チャーチという記者でした。

ヴァージニア、それは友だちの方がまちがっているよ。きっと、何でもうたがいたがる年ごろで、見たことがないと、信じられないんだね。自分のわかることだけが、ぜんぶだと思ってるんだらうね。

でもね、ヴァージニア、大人でも子どもでも、何もかもわかるわけじゃないんだよ。…（少し省略）

じつはね、ヴァージニア、サンタクロースはいるんだよ。愛とか、思いやりとか、いたわりとかが、ちゃんとあるように、サンタクロースもちゃんといるし、そういうものがあふれているおかげで、人の毎日は、いやされたり、うるおったりするんだよ。…（中略）

サンタクロースはいない？ いいや、今このときも、これからもずっといる。ヴァージニア、何千年、いやあと十万年たっても、サンタクロースはいつまでも、子どもたちの心を、わくわくさせてくれると思うよ。

この社説は、当時のアメリカですごく話題になって、クリスマスが近づくと毎年のように新聞に掲載されました。そしてこの社説だけで一冊の絵本が作られると、世界中でベストセラーになりました。日本でも1977年に発売され、ロングセラーを続けており2009年に改訂版が発行され、私が持っている本の奥付には、108刷と書いてあり、50年近く版を重ね読み継がれています。

私は中学生に、「サンタがいる、いない」の論争をふっかけたのではありません。なぜこの本が世界中で売れ続けているのか、その理由を考えさせた

のです。「愛」とか「他人への思いやり」が満ちあふれているから、人は癒やされたり潤ったりするということを教えたかったのです。

1943年に発表されたサンテグ・ジュペリの「星の王子様」は、世界的なベストセラー小説となり、今でも読み継がれています。有名なキツネのセリフ、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」にも触れつつ、目に見えない大切なものが確かにあることを訴えました。

例えば「人のやさしさ、おもいやり、きずな」などは目に見えない。だから自分の心を育てて、「感じる心」をつくるようにしないといけないと教えました。

ほとんどの生徒が、ねらい通りの感想を書いてくれました。例えば

○ぼくは6年の頃にお母さんに、「サンタクロースはいないんだよ。お父さんとお母さんが、お店に行って買ってきて、お家においでいたんだよ」と、言われました。ぼくはサンタクロースを信じていたのに、母からの急な告白で、とても泣きくずれました。ぼくが結婚して赤ちゃんが生まれて、もの心がついたころに、「サンタクロースっているの？」と必ず聞かれると思います。そのときは「いるよ」と教えて、心の中のサンタクロースをいつまでも感じさせてあげたいです。(中2男生徒)

○話を聞く前は、「なんで中学生にそんな話をするのかな？みんな、いないとわかっているのに」と、思っていました。でも私は今日の校長講話を聞いて、「サンタクロースはいるかも？」って思いました。

「目に見えない大切なもの」という話を聞いたときに、言葉ではうまく表せないけど、それとサンタクロースはなんか似ているような気がしました。「目に見えない大切なもの」は、私の身のまわりにあふれていると思います。それを運んでくれるのは、私のまわりの人たちだけど、なんとなくサンタさんからのプレゼントをもらっているようだなあと思いました。私が親の立場になって、自分の子どもが「サンタさんはいるの？」と聞いてきたら、ちゃんと「いるよ」と言ってあげたいです。(中3女生徒)

しかし、一人だけ違う路線で感想を書いた生徒がいました。

○サンタクロースがいるとかいないとか考えるのは、その人の自由ですが、ぼくは、いないと思います。なぜかというところ、見たこともないし、もらったこともないからです。小学3年生のときに、ずっと起きて見ていたが、来ませんでした。サンタなんていないんです。存在していたら、会いたいです。(中1男子)

同じような制服に身を包んで登校してくる生徒達だが、サンタにお願いをして毎年もらっている生徒達もいれば、彼のようにサンタが一度も来たことがないという生徒もいる。自分の人生を切り開いていくのは、自分自身の努力しかないと考えます。「人間はけして平等ではない。でも、幸せになる権利は誰にでもある。」と、ずっと中学生に教えてきた。自分の立っている現実をしっかり認識して、そこから積み上げていくしかない。反骨精神やプラス思考で人生を切り拓き、幸せを求めて一生懸命に努力を続けていけば、きっとサンタは現れます。そう信じて、頑張っ

12月26日（火）その114 両親のいる風景と聖徳太子の五千円札

私の両親は、もう亡くなりました。妻の両親も亡くなっています。新しいカレンダーをもらおうと、まず家族5人の誕生日の日に名前と年令を書き込み、両方の両親の命日を書き込みます。

カレンダーには書きませんが12月22日は、私の母の誕生日でした。大正10年（1921年）生まれで、生きていれば96才です。私の両親は同い年でしたが母は85才で、父は病気のため20年も早く64才で亡くなりました。

私の両親の世代の青春時代は、日本が戦争へと突き進み「沖縄戦」が真っ盛りの時代です。運よく戦争時代を生き抜き、戦後の何もない苦しい時代に結婚し、そして6人の子ども達を育てるために必死で働いたのです。

琉球民謡の「艦砲ぬ喰えー残さー」という歌があります。「若い頃は戦の世で青春の花も咲かせることできなかつた。親も兄弟も艦砲射撃にやられてしまい、着る物も食べ物も何もなく、ソテツを食べて生きながらえてきたね」と、歌っています。また、井上陽水の「人生が二度あれば」という歌は、息子が年取った両親を見つめて「顔のしわが増えてきた。仕事に追われて子ども達を育てるためだけに年とった。人生が誰のためにあるのかわからない。人生が二度あればいいのに……。」と歌っています。

両親との思い出は、たくさん私の心に刻まれています。その一つに私が高校生のとき両親とサバニで近くの無人島まで漁に行ったときの光景があります。新造したばかりの父のサバニで、近くの無人島に魚や貝やたこをとりに行ったのです。私は当時普及していたコンパクトカメラ（「使い捨て」ではない）を持っていて、真新しいサバニを前にした父親を撮影しました。母はすでに近くで、タコを捜していました。今思えば母を呼び止めて、一緒に写せばよかったなと後悔しています。この写真です（見せる）。近くにいる母を含めてこの光景が私の心に刻み込まれていて、両親を思い出するときの一つの「原風景」となっています。何の心配事や悩みもなく、たぶん「ありふれた幸せな時間」を送っていたのだと思います。

私は高校生のとき一人でアパートで生活をしていましたが、ある時「お金がない」と家に電話をすると、母から手紙と五千円札が送られてきました。「食費が足りず、家にあるあり合わせのもので夕食を作っているという我が子の姿を思い浮かべ、昨夜は眠れませんでした。近々那覇に行くので当分の間この五千円を使っておきなさい」と、書かれていました。45年も前の五千円札ですから、高校生にとっては大金でした。

しかし私は、その手紙と五千円札をそのまま「私の宝箱」の中に入れて、ずっと持っていました。10年ほど前、母が亡くなった後で、このように（実物を見せる）ラミネートをして、毎日見る自分専用の鏡の横にぶら下げています。その近くには、小さな写真立てに両親の遺影を飾ってあります。

私は6人兄弟で、両親の孫は全員で20人です。「産し繁盛、栄え繁盛」（なしはんじょう、さけーはんじょう）という言葉があります。子孫繁栄という意味では、私の両親は幸せ者だったのかも知れません。

昔の同僚で、「自分の誕生日には、必ず親に会いに行って感謝の気持ちを伝えている。」という方がいました。皆さんももし親が元気なら、元気な内にいろいろと親孝行をしてあげてください。

参考資料1 新造のサバニを前に父親を映す。すぐ右に母親がいてタコをさがしている。
昭和48年（1973年）頃



参考資料2 自宅の自分専用の鏡の横に掛けてある母親の手紙と聖徳太子の五千円札をラミネートした物のイメージ（お金はコピーできないので。）



※（次のページに「その 115」あり）

12月28日（木）その115 新玉ぬ年に炭と^く昆布^ぶ飾^くてい^く 心^くから^く姿^く 若^くくな^くゆ^くさ

今日で仕事納めです。学校では終業式を終えれば年休も取れるのに、研究所はしっかり 28 日まで勤務です。しかも今日は、南部広域行政組合全員での大掃除がありました。とてもきれいになって気持ちがいいですね。

さて、皆さんは「師走」の語源がわかりますか？現在使っている「師走」の漢字は、当て字だということです。奈良時代の「日本書紀」や「万葉集」にも「しはす」が出てくるようです。平安時代末期のある書物の中にも「しはす」が記載されていて、「僧侶が仏事で走り回る忙しさからきている」と書いてあるそうですが、他の文献等には全く出てなく、根拠のない話とされているようです。実は師走の語源は、「よくわからない」のだそうです。

大晦日（おおみそか）という漢字は、「おおつごもり」とも読みます。三十路（みそじ）、四十路（よそじ）、五十路（いそじ）という言葉がありますが、「みそか」というのは、「月の 30 番目の日」という意味です。しかし太陰暦は 29 日の日もありますので、月の最終日を意味するようになりました。「大みそか」は、一年の最後の月の最終日という意味です。「つごもり」というのは、「月隠り」（つきごもり）という言葉が転じたもので月が欠けていて最後には隠れて見えなくなっていくことから、そう呼ぶのだそうです。清少納言の随筆「枕草子」の中に「二月つごもりのころに風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたる・・・」という一節があるそうです。

ところで皆さん、ここでクエスチョンです。なぜ年の終わりはきちんと 31 日までであるのに、2 月が 28 日と半端な数なのでしょう。わかりますか？実は古代のローマで使っていた暦は 3 月から始まり 2 月で終わっていて、それで年末の 2 月に端数を持っていったのだそうです。その後ユリウス・カエサル（シーザー）がユリウス暦を作ったときも、基本的にはその考え方を踏襲したので、端数を 2 月にまとめたのです。

新玉ぬ^と年に^し 炭^くと^く昆布^ぶ 飾^くてい^く 心^くから^く姿^く 若^くくな^くゆ^くさ

本土復帰後、飾り物「しめ縄」の文化が入ってきましたが、沖縄では「チャンプルー文化」で、しめ縄に炭と昆布をつけました。これは沖縄独特のもので、県外の一般的なしめ縄にはついていません。みかんは両方の物についています。ミカン（橙）は、鏡餅の上にも乗っていますね。橙（だいたい）という品種のみかんは、冬が過ぎても果実が木から落ちずに 2～3 年は、枝についているそうです。そこで橙が代々に通じることから、子孫繁栄の正月の縁起物として全国的に使われるようになったそうです。

沖縄では昔から、火の神（ひぬかん）などに、炭と昆布をお供えしていたそうです。炭は、「長持ちする、消えない」「たんと、たくさん」の意味の縁起物だと思います。昆布は「こぶ」とも読みますから、日本全国で「喜ぶ」に通じるだじやれで使われるようになったと聞いています。

さて、平成 29 年も後数日となりました。明日から年末年始休です。普段できないような大掃除や家庭サービスをたっぷりやって、ご先祖様にもウートーを忘れずに、家や家族のために多くの時間を使って下さい。

平成 29 年（2017 年）お疲れ様でした。来年「戌年」もよろしく！